

自由、その名はサマーヒル

—SUMMERHILL—

著 A. S. Neill

訳 真 崎 良 幸

サマーヒルの理念

この書は革新学校サマーヒルの物語である。

サマーヒルの創立は1921年。ロンドンから百マイル程離れたサフォーク州のレイストン村に位置している。

サマーヒルに入学してくる生徒についてひとこと述べることにしよう。生徒の年齢は5歳から15歳までで、ふつう16歳まで学校にいる。生徒数は男子25名、女子20名である。

子どもは年齢別に3グループに分かれている。最年少組は5歳から7歳まで、次が8歳から10歳、そして年長組が11歳から15歳までである。

かなりいろんな国から生徒が集まっている。1960年現在ではスカンジナビアから5名、オランダ、ドイツ、アメリカからそれぞれ1名ずつ来ている。

それぞれのグループには寮母がつき、年中組は石造の建物で眠り、年長組は木造の小屋で眠る。年長組のなかの1、2名だけ個室が与えられている。男子は2名から4名の合部屋である。女子も同様。生徒は寮内で、自分の部屋や行動を監視されるようなことはない。自由が尊重されている。服装の規制も全くない。どんな時にどんな服装をしてもよい。

新聞ではこの学校を「勝手気まま学校」だと呼んでいる。礼儀も作法もわきまえない無法者の集りだといっている。

そこで、私はサマーヒルとはどんなところかを皆さんに知っていただきたいと思って筆を執った次第である。私はできるだけありのままに書くつもりだが、

当然、片寄った見方をするときもあるだろう。しかし、サマーヒルの良い点も悪い点も全部ここに書いてみたいと思っている。この学校の良い点といえば、恐怖心や憎悪から解放された、生き生きとした子どもが育っているということだろう。元気な子どもを机にしばりつけ、役にも立たない教科を頭に詰め込む学校が良い学校だといえるだろうか。もちろん、そういう学校を求める人には良い学校だろう。自分の子どもが文明社会の歯車となって、人からいわれたように仕事をし、お金をためることだけが人生の目的だと考えている、創造性を失った親にとっては良い学校だといえるだろう。

サマーヒルは実験学校として生まれたが、もう実験の段階ではない。今では「自由が学校を救う」ことを証明する学校に育っている。

私には、今は亡くなった先妻と2人でこの学校を始めたとき、ひとつの基礎になる理念があった。それは「子どもを学校に合わせ」ることをやめて「学校を子どもに合わせ」ようということだった。

私は長年、公立学校に勤めた。だから、自由のない教育がどんなものかよく知っている。その教育が間違っていることも知っている。なぜ間違っているかって？ それは学校が、子どもは「こんな人間になるべきだ」とか、「こんな勉強をすべきだ」といったおとなの考えに基づいているからだ。こういう教育は心理学という学問がまだなかった時代の産物である。

さて、私たちが学校を始めたとき、子どもたちが自分自身になれる自由を与えた。これを実行するために、すべてのしつけ、指導、忠告、道徳教育、宗教教育を排除した。そのとき私たちは「勇気のある先生だ」といわれたが、実際勇気など必要なかった。必要だったのはただ一つ、子どもは悪ではなく善であるという、ゆるぎない信念だった。この信念は40年近くたった今でも変わらない。むしろ一層確かなものになってきた。

私の考えでは、子どもは生まれながらに賢く、現実的なものだ。おとなが忠告をやめて、ひとりにしてやると最大限の発達を示すものだ。サマーヒルとは、たとえば、生徒が学者になる能力があり、それを希望すれば学者にさせるし、掃除夫に向いている生徒には掃除夫になることを反対しない学校だといえるだ

ろう。でも、まだ今のところは掃除夫になったものはいない。私はなにも掃除夫になることが良くないと思っているからこういつているのではない。この学校はノイローゼの学者よりもむしろ幸せな掃除夫を歓迎する。

サマーヒルとはどんな学校だろうか。サマーヒルでは授業に出たくなければ出なくてもよい。生徒は授業を強制されない。時間割はあるが、これは先生のためのものだ。

子どもは普通、年齢に応じてクラスを組んでいるが、興味に合わせて組まれることもある。なにも「新しい教育法」があるわけではない。「教育法」というものはあまり重要ではない。たとえば、2桁以上の割算を教えるための良い教育法があるかどうかということはたいした問題ではない。なぜなら、そういうものはそれを学びたい人にだけ重要だからだ。また長除法を学びたいというモチベーションを持つ子どもは「教育法」の如何にかかわらず覚えてしまうものである。

幼稚園児としてサマーヒルに來ている子どもたちは始めから授業に出るが、他校から転校してきた子どもは、「この学校は授業に出なくてもいいのだからおれは絶対にでないぞ」と言いはる。こういう子どもは元気に遊び回り、人の邪魔はしても授業には出ない。この状態が何カ月も続くこともある。回復する時間は前の学校が植え付けた憎悪に比例するようだ。いままでで回復の時間がいちばん長かったケースは修道院から來た子どもだった。彼女は3年間授業に出なかった。普通、授業嫌いがなおる平均の期間は3カ月だ。

サマーヒルの自由の考えに慣れていない人は「子どもが好きなきに遊んでもいい」学校なんて気違い沙多だと思われることだろう。多くのおとなはこう言う。「もし私がこんな学校に行っていたなら、何も学ばなかったことだろう」またこう言う人もいるだろう。「社会に出て他の学校で勉強を強いられた子どもたちと競争するときに大きなハンディーを負わなければならないじゃないか」と。

サマーヒルを18歳で卒業して自動車工場に就職したジャックという子がいた。ある日、上司から呼ばれて、こう言われた。「君はサマーヒル出身だね。今は

もう他校出身の人たちと一緒に働いているわけだけど、サマーヒルを振り返ってみてどうだね。もし、もう一度生まれ変わって学校に行くならイートン校にするかね、それともサマーヒル？」

「もちろん、サマーヒルです」とジャックは答えた。

「サマーヒルには他の学校にない何があるんだい」

ジャックは頭を掻きながら、ゆっくりと「よくわかんないけど、自信がもてる学校じゃないかな」といった。

上司は「そうだろうね。君と初めて会ったときから、君の自信は感じていたよ」と冷静な口調でいった。

ジャックは笑いながら、「えっ、そんな印象を与えてたんですか。申し訳ありません」

上司は「いや、それが気に入ったんだよ。面接の時はたいていの場合、みんな、もじもじしたりして落ち着きがないんだが、君は違っていたね。私の同僚みたいだったよ。ところで、君はどの課で働きたいと言っていたかね。希望を叶えてやろう」と言った。

この話は学問自体よりもパーソナリティーや人格の方が大事だということを表している。ジャックは入試に失敗した。理由は本の学習が嫌いだったからだ。でも、ラムの随筆を読まなかったとか、フランス語ができなかったということは社会に出てなんのマイナスにもならなかった。ジャックは立派に成功している。

そうはいっても、サマーヒルでは学問を重視しないということではない。わが校の12歳の子が他校の同年齢の子と綴りや分数の競争をした場合、たぶん負けるかもしれない。しかし、独創性を要求するような試験では、はるかに勝てるだろう。

サマーヒルには試験などない。でも、ときどきおもしろ半分に試験をすることがある。例えば、こんな問題を出したことがある。

次のものは何処にあるのだろうか。

マドリッド, 木曜日, 島, 昨日, 愛, 民主主義, 憎悪, 私のドライバー

(残念ながら最後の項目の答えはどれも役に立たなかった。私のドライバーは何処にいったのだろうか?)

次のことばの意味をかきなさい。() 内の数字は意味の数を表す。

Hand (3)

この問題で3番目の意味, 手幅(馬の高さなどを図る単位)を書いたものは2人だけだった。他にも,

metal

cheek

top army officers

department of an orchestra

などの意味を書かせたり, ハムレットの *to be or not to be* をサマーヒル弁に訳させたりした。

もちろん, こういう問題は冗談半分なので子どもはたいへん喜ぶ。新入生は概しておもしろい答えを書くことができない。それは, なにも頭が悪いからではなく, 今までの学校での厳しいしつけに慣れているために, 冗談を受けつけない心になっているからだ。

今お話ししたことはサマーヒル教育の遊びの一面だ。教室ではみんなよく勉強する。何かの理由で先生が授業に來れなかった場合, 生徒はがっかりする。

ダビデは九歳のとき百日ぜきのため授業に出さなかった。彼は, 「ロジャー先生の地理の授業に出られない」といって泣きながら抗議した。ダビデは事実上, 生まれたときからサマーヒルに通っている。彼には勉強をしなくちゃなら

ないという自覚があった。今ではロンドン大学で数学を教えている。

数年前、自治会（この会では学校の規則が生徒と教師の投票で決められる）で、規則違反者は一週間授業にでられないことにしよう、という提案がなされた。しかし、その処罰は厳しすぎるということで否決された。

私も他の先生も試験は大嫌いである。私たちにとって、大学入試は呪いである。しかし、入試科目を教えることを避けて通るわけにはいかない。入試が存在する限り、私たちは入試の奴隷である。だから、サマーヒルの教師は全員入試問題を教える資格を有する。

これはなにも多くの生徒が入試を受けたいと思っているということではない。大学に行く意志を持っているものだけがそう思っているのである。普通、14歳になると入試の勉強を真剣に考え始める。そして3年ぐらいで完成する。もちろん、みんなが1回で合格するわけではない。しかし、それよりも大事なことは、落ちてでも再度挑戦するということだ。

サマーヒルはおそらく世界でいちばん幸福な場所かもしれない。授業をさばる生徒もいないし、ホームシックにかかる生徒もめったにいない。喧嘩もほとんどしない。もちろん口論はあるが、私が子どもの頃よくやった殴り合いの喧嘩などはめったに見ない。泣くこともめったにない。自由の子どもは、抑圧された子どもよりも発散させる憎悪が少ないからだろう。憎悪は憎悪によって生まれ、愛は愛によって生まれるものだ。愛とは子どもを認めることである。これは学校の本質でなければならない。子どもを厳しく処罰したり、がみがみいって叱ることは子どもの味方になることに反している。サマーヒルとは子ども自身が認められていることを自覚している学校といえるだろう。

そうはいっても、私たちは普通の人間以上でもない。かつて私は、春に何週間もかけてじゃがいもを植えたことがあった。6月に行ってみると、八本抜かれていた。私はそのとき大声で怒ったことがある。しかし、私の大騒ぎと権力者のとでは大きな違いがある。私はじゃがいもがないことで大騒ぎしたわけだが、権力者の場合は正しいか間違っているかという道德上の善悪の問題にってしまう。私は、私のじゃがいもを盗むのが良いとか悪いとかいったのではない。

ただ、私のじゃがいもだからそっとしてほしかっただけである。違いがわかってもらえるだろうか。

別の言い方をしてみよう。子どもにとって私は恐るべき権力者ではない。私は彼らの同僚である。だから、私がじゃがいもがなくなって大騒ぎをしたことは、生徒が自転車のパンクで大騒ぎしているのと同じく、彼らにとってたいした意味を持たないのである。相手が同僚の場合、いくらわめいても安心である。さて、みなさん方の中で「そんなことはでたらめだ。先生と生徒が平等なんてありえない。あなたは校長であり、生徒よりも体も大きいし知識もある」と言われる方がいらっしゃるかもしれない。たしかに私は校長だ。学校が火事になれば生徒は私のところに逃げてくるだろう。生徒は私の方が図体がでかくて知識があることを知っているだろう。しかし、そういうことは彼らとじゃがいも畑で会っているときには問題にならない。

たとえば、5歳になるビリーは、彼の誕生パーティーに招待を受けずに行った私を見て「先生は招待してないんだから出て行ってよ」といったとき、私はためらわずに出て行った。同様に、私の工作中、ビリーが部屋にきて、構えない場合「今は手が離せないんだ」というと、素直に部屋から出て行く。教師と生徒とのこういった関係を説明するのはむづかしいのだが、わが校を訪問した人は私のいう意味がわかってくれる。

サマーヒルではみんな同じ権利を持つ。誰も私のピアノの上を土足で歩くことを許されない。また私も、生徒の自転車を許可なしに借りるわけにはいかない。自治会では6歳の子どもの一票と私の一票の重さは同じである。

「そうはいっても実際は、教師の言いなりになるんじゃないか。たとえば、6歳の子どもは先生が手を上げるまで様子をうかがってるんじゃないのか」といわれるかもしれない。ときにはそうあってほしいと思うことがある。というのも、何度となく私の提案が否決されたからだ。自由の子どもは人から容易に影響されることがない。恐怖心のなさがそうさせるのだろう。たしかに自由の中ではまず、恐怖心がなくなる。

サマーヒルの子どもは先生を怖がることはない。午後10時以降は寮の2階で

は静かにしなければならない、という規則がある。ある晩11時頃、枕投げが始まった。私は下の部屋で書き物をしていたので、静かにしてもらおうと抗議をするために部屋を出た。2階にあがってみると、足早に逃げる音がして廊下は物陰もなく静かだった。突然、部屋の中からがっかりした声がきこえた。「なんだ、ニイルじゃないか」そして、また騒ぎが始まった。私はみんなに、今、下で仕事をしてるときだから静かにしてくれないかという、わかってくれて、騒ぎをやめてくれた。彼らは巡回係（同僚の生徒がやっている）が回ってきたのだと思って逃げたのであった。

おとなが子どもに恐怖心を与えないということはとても大切なことである。9歳になる子どもが私のところに来て、ボールで窓ガラスを割りましたといにくる。なぜ来るのか。それは、怒られたり、だめな子どもだと叱られたりすることがないからである。窓ガラスの代金を支払うことはしなければならないが、お仕置きを受けたり、罰せられることはない。

数年前、自治会が解散したとき、次期自治会に誰も立候補しなかったことがあった。この機会をとらえて私は次のような掲示をだした。

「今は無政府状態なので、私が独裁者になることを宣言する。ニイル！
バンザイ！」

すると、やがて騒がしくなってきた。その日の午後、6歳になるヴィヴィアンが私のところに来て「ニイル、体育館の窓を割っちゃった」と言った。

私は「そんな些細なことと言いに来なくてもいい」と言って帰した。

数分後、彼は戻ってきて、窓を2枚割った、と言いにきた。私はおもしろくなったのできいてみた。「いったい何を考えてるんだい」

「ぼくは独裁者が嫌いだ。それに食事ぬきで帰りたくない」（後でわかったことだが、独裁に反対の子どもたちが当たり散らしたので料理係が台所を閉めて帰っていたのである）

私はきいてみた。「それで何をしようというのかね」

「もっと窓を割るのさ」彼は強情に言い張った。

「かまわないよ」と私が言うと彼は窓を割り続けた。

彼は私のところに戻ってきて、窓を17枚割ったよと言った。「でも、」と彼は真面目な顔で言った。「窓の代金は払うからね」

「どうやって？」

「小遣いからさ。どのくらいかかるかな」

「10年ぐらいかな」

彼は一瞬むっつりした。しかし、次の瞬間明るくなって、「そうだ、代金は払わなくていいんだ」と言った。

私はきいた。「でも個人の所有物を壊した場合の校則はどうなるんだい。あの窓ガラスは私のものだよ」

うん、わかってるよ。でも、今は自治会がないからあの校則は無効さ。校則は自治会でつくるんだからね」彼は私の顔を見ながら「でも、とにかく全部償するよ」と付け加えた。

しかし実際、彼は弁償しなくて済んだ。というのは、この後しばらくしてロンドンの講演に招かれたときにこの話をしたことがある。講演後、ある青年が私のところにきて、私に1ポンド紙幣を渡して「いたずら坊頭の割った窓ガラスの代金の足しにでもしてください」といった。それから2年たった今でもヴィヴィアンはあの窓ガラスのことで代金を支払ってくれた奇特な青年のことを語り草にしている。「あの人はどうしようもないバカだったんだろうね。ぼくを見たこともないのに、かばってくれるなんて」

子どもは、恐怖のないところでは、初めて会った人にも人みしりすることはない。イギリス人が遠慮深いというのは根底に恐怖心があるからだ。だから、もっとも遠慮深い人とは、もっとも富を蓄えている人だといえるのである。サマーヒルの子どもたちが、訪問客や初めての人たちを怖がらないで、打ち解けることができることはわが校の誇りでもある。

しかし、実際サマーヒルの訪問客は子どもたちにとって興味の対象となる場合が多い。子どもが一番嫌う客は教師である。特に「熱心な」教師。子どもの

絵や作文を覗き込んで熱心に観察する教師である。いちばん歓迎される客はおもしろい話をしてくれる客である。いろんな冒険談、旅行談あるいは飛行機の話をしてくれる人に子どもは群がる。ボクシングの選手やテニスの選手も人気がある。理論をぐたぐたと述べるような人の回りにはしらけ鳥が飛ぶ。訪問客はよく「先生と生徒の見分けがつきませんね」と言う。これは事実である。子どもは自分が認められていると知ったとき、共同体としての意識が強くなるからだろう。教師に対して「先生は怖い」という感覚は生徒には全然ない。教師も生徒も同じ食事をし、同じ規則に従わなければならない。もし教師が特権を持とうとすれば生徒は抗議するだろう。

私は職員に対して毎週1回、心理学の話をすることにしてしたが、生徒の中から、先生だけしか話が聞けないのは不公平だという声が出た。そこで、12歳以上の生徒も一緒に聞いてもいいようにした。それで、毎週火曜日の夜は、私の部屋には少年たちのむんむんした熱気が溢れている。彼らはただ聞くだけでなく、話の後で自分の意見も述べる。今までに生徒たちが選んだテーマは次のようなものがある。

「劣等感」「盗みの心理」「ギャングの心理」「ユーモアの心理」

「なぜ人は道徳家になったのか」「マスターベーション」「群集心理」などである。

こういう子どもが社会に出るとき、自己についても他人についても広い視野をもっていくことは間違いないだろう。

サマーヒルを訪れた人が一番よくする質問は「算数や音楽をみんなに教えなかったということで、卒業生があとから学校を非難することはないのか」というものだが、その答えは「若きベートーベンもアインシュタインも、自分のやりたいことをやらせなかったときにこそ反発したに違いない」ということである。子どもは自分で選んだ生活をすべきであって、決して心配顔の親が押しつける生活、あるいは、したり顔の「教育者」の選んだ生活をするものではない。おとなが干渉したり指導したりして生まれるのはロボット人間なのである。

強制によって子どもに音楽でも何でも学ばせようとするれば、子どもは意志の

希薄な半人前の人間になってしまう。つまり、子どもは洗脳され、現状に満足してしまうのである。こういう人間は、退屈な事務机でお行儀よく座って仕事をする事務員、店に立って同じことばを繰かえす売り子、午後8時30分の郊外へ走る列車に毎日かかさず乗って帰る「真面目な」会社員、こういう人たちを必要とする社会にとっては好都合である。つまり、おびえている小人——死ぬほどおびえている「優等生」——のみすぼらしい肩に背負われた社会にとっては好都合なのである。

サマーヒルの一日

サマーヒルの一日の生活を書いてみよう。まず、8時15分から9時までが朝食の時間である。生徒も教師も台所から食事をもらって食堂で食べる。9時30分に授業が始まるので、それまでにベッドをかたずけることになっている。時間割は学期の始めに掲示される。デレック先生は月曜日に研究室で1組の授業、火曜日に2組というようになっている。私も同様の時間割で、英語と数学を担当している。モーリス先生は地理と歴史という具合である。7歳から9歳までの年少組は午前中、担任の先生の教室で過ごすことが多いが、科学室や美術室に行くこともある。

生徒は授業を強要されることはない。しかし、もし、ジミーが英語の授業を月曜日に出たきりで、次の週の金曜日まで休んだ場合、当然、ほかの生徒は、授業の妨害になるとして彼をクラスに入れなくてもよい。授業は1時までであるが、下級生は12時30分に昼食をとることができる。昼食には2つの時間帯を決めている。上級生と教師は1時30分からである。

午後は自由時間である。みんながこの時間に何をやっているか私は知らない。私自身は庭仕事をしているが、回りに子どもはめったにいない。遠くで年少組の子どもたちが暴れ回っている姿が見える。年長組の子どもはオートバイやラジオをいじったり、絵を描いたりして忙しいようだ。天気の良い日には、外でゲームをしたりする。工作室で自転車の修理をしたり、ボートを作ったり、お

もちゃのピストルを作ったりしている者もいる。

4時になるとお茶の時間だ。5時にはいろんな活動が始まる。年少組は本を読んでもらうのが好きだ。年中組は美術室で絵を描いたり、リノリュームの敷物作りをしたり、皮製品作りや箆作りをするのが好きである。焼き物の工作室はいつも賑やかである。実際、この部屋は午前、午後を問わず人が多い。木工金属工作室も毎晩生徒で賑やう。

月曜日の夜は近くの映画館で映画を見るが、お金は親から貰う。この時間にいろいろな読書をする者もいる。水曜日の夜はダンス大会である。たくさんのレコードの中から生徒たちが自由に好きなものを選ぶ。子どもは実にダンスがうまい。訪問客も一緒に踊って、おとな顔負けだという。木曜日の夜は特に行事はない。上級生の中にはレイストンかオールドバラに映画を見に行く者が多い。金曜日は劇の稽古のような特別な活動をやっている。土曜日はわが校でいちばん大切な日、つまり自治会の日である。会が終わると、普通ダンスが行なわれる。冬の日曜日は演劇観賞である。

工作という時間は設けていない。子どもたちは自由時間に自分の好きなものを作るのである。彼らの好きなものは、おもちゃの拳銃とか、船とか、凧などである。既成のありつぎの組み立て遊びなどにはあまり興味を示さない。上級生でも複雑な工作には関心を示さない。私の趣味であるしんちゅう細工にはあまり関心がないようだ。しんちゅう細工にはあまり夢がないからだろう。

天気の良い日には、元気のいい男の子は校内にはいない。校外で暴れ回っている。女の子は校内に残っている。校舎の中か、近くで遊び、おとなから離れない。

美術室は女の子が集まり、絵を描いたり、織物で明るい物を作ったりしている。しかし、一般的にいて、男の子の方が創造的な仕事に興味があるようだ。少なくとも、男の子から、「何をやっていいかわかんないや。つまんないな」というような声を聞いたことがない。女の子はそういうことをいうことが時々ある。

男の子が女の子よりも創造的なものに興味を示すのは、学校というものが男

子向きに作られているからだろう。女子は10歳を過ぎれば、鉄工や木細工などほとんど役に立たなくなるからである。女子はエンジンを扱ったり、電気やラジオに興味を持ったりしない。女子の好きなものは美術であり、その中には焼き物や、リノリューム・カットや、絵画や、裁縫などがあるが、それだけでは十分ではない。料理は男子も熱心である。また、男女共に、戯曲を書き、自分たちで衣装や道具を揃えて演出したりする。一般的に演技の才能は優れているといえる。演技にわざとらしさがなく、自然で、嫌みがない。

女子は男子同様、よく化学室に行く。工作室は九歳以上の女子が関心を示さない唯一の場所である。

自治会では女子の方が男子より消極的である。これはなぜだか今のところ説明がつかない。

数年前までは、女子はかなり大きくなってサマーヒルに来ていた。修道院や厳しい女子校から問題生徒が来ていた。しかし、私はこういう子どもを療すことが自由教育の本来の姿だとは思っていない。このようにかなり大きくなって問題を抱えてくる女子の親は自由の意味がわかっていない場合が多い。もし、わかっていたなら、子どもは問題生徒にはなっていなかっただろう。そして、サマーヒルで問題が解決すると、親はすぐに「良い学校」に戻して、また教育を受け直させるのである。しかし、最近ではサマーヒルの自由教育を信じている家庭の子どもが多くなってきた。これらの子どもは独創性に富み、快活で、とてもたくましい。

授業料が続かないで退学していった女の子もいた。この子には兄弟がいて、学費の高い私立学校に行っているため彼女が犠牲になったのである。家庭では男の子がいちばん大切なものだ、という古い伝統はなかなかなくなるらない。また、独占欲の強い親の嫉妬のためにやめていった子どもたちもいる。この親は、家庭に対する子どもの忠誠心が学校に奪われるのではないかと恐れたのであった。

われわれは、サマーヒルが存続するために、いつも努力を怠ってはならなかった。遊びも勉強も自由だというような学校に子どもを任せるだけの寛容な心

と信念を持つ親は少ないのである。ほとんどの親は、子どもが21歳になって、ほんとうに実社会で働けるようになるのだろうかと心配するのである。

今日では、サマーヒルの生徒の親は、がみがみいつてしつける「教育」を望んではいない。これは、われわれにとって良い環境になってきた。昔は、頑迷な権力主義の親が、子どもを持て余して、サマーヒルに駆け込んできたものである。こういう親にとって、子どもの自由などというものはどうでもいいことであった。そして、心の中ではわれわれ職員を気違い集団だと思っていたに違いない。こういう頑固者に自由教育の意味を説明するのは容易なことではない。

一度、軍人あがりの親が9歳の子どもを連れて来たことがある。彼はいった。

「ここは環境は良さそうだが、一つだけ気掛かりなことがある。息子はマスタベーションを覚えてしまいそうだな」

私は、それがどうして気掛かりなのかをきいてみた。すると、

「うちの子がそんなことしたら大変なことになる」

「ほう、あなたがやった時、大変なことになりましたか。私の場合は大丈夫でしたが」

と私はにこやかにいった。

彼は子どもを連れていそいそと帰って行った。

それから、こういう事もあった。ある日、金持ちの夫妻がやって来て、母親の方が一時間ばかり私に質問責めをした後で、夫に向かって言った。

「ねえ、あなた。マジョリをこの学校にやるかどうか決心がつかないわ」

「ご心配無用です」と私は言った。「私のほうで決めておりますので。入学はお断りします」

私はこの母親に私の本当の気持ちを説明しなければならなかった。「あなたは自由を信じていらっしゃるいませんね。もし、マジョリがサマーヒルに来ることになれば、私は一生かけて自由とはどんなものかをあなたに説明しなければならないし、そうしても、あなたは結局、納得しないでしょう。それはマジョリにとって災難です。彼女はいつも迷うことになる。『家庭と学校、一体どちらを信じたらいいのかしら』と」

わが校にとって理想的な親とは「わたしたちの子にはサマーヒルしかありません。他の学校ではだめなんです」と言う人たちだ。

私たちが開校した当初は特に、いろんな困難が待ちかまえていた。最初は、上流、中流階級からだけしか子どもを入学させなかった。それは財政上の理由でしかたがなかった。お金持ちの支援者はいなかった。初期の頃、匿名希望の奇特家が、1、2度学校の危機を救ってくれたことがある。また、卒業生の親で、新しい台所やラジオを買ってくれたり、工作室を建てたり、寮の建て増しをしてくれたりした人もいた。こういう方々は理想的な奇特家だった。ある人は何の条件もつけず、みかえりを要求することもなく、ただ、こう言った。

「サマーヒルは息子のジミーに私の望む教育をしてくれた」このジェームズ・シャンド氏は子どもの自由というものを心から信じている人だった。

しかし、とても貧しい家庭の子どもを入学させることができなかったのは残念だ。中流階級の子もだけしか教育できなかったからだ。お金と高価な洋服の下に隠されている子どもの本質を見抜くのは困難な時がある。たとえば、ある女の子が、今度の21歳の誕生日に親からたくさんお金を貰えることがわかっている場合、この子の本当の心理を見極めるのは容易なことではない。しかし、幸いにも、サマーヒルの生徒は昔も、今も、お金のために甘やかされて、だめになった者はいない。みんな、社会に出れば自分で自活しなければならないことを認識している。

サマーヒルは町から部屋の清掃係を雇っているが、彼女らは1日中、一所懸命働いて、夜は自分の家に帰って寝る。みんな若いが、よく働いてくれる。上からとやかくいう人がいない自由の中では、監視下の場合よりよく働くことがわかる。この人たちには全く感心させられる。しかし、こういう貧しい人たちが辛い仕事をしなければならないということは残念である。自分のベッドの準備すらできない、お金持ちで甘やかされた子どももいるが、大きな違いである。こんなことをいう私も、実は、自分でベッドを用意したくない一人である。こんなときに「他にすることが山ほどあるから」などというような、説得力に欠ける言い訳をしても子どもは納得しない。このような「上等兵にごみを拾わせ

るとは何事だ！」といった種類の言い訳は子どもからバカにされるのがおちである。

何度も言うようだが、サマーヒルの職員はなにも神さまではない。われわれは、みんな同じ人間であり、その人間の弱さのために壁にぶつかることがしばしばある。普通の家庭では、子どもが皿を割れば、親はやかましく叱る。しかし、これは子どもより皿の方が大切だという印象を与えるだけである。サマーヒルでは、子ども、あるいは清掃係が皿を落として割らした場合でも、私は何もいわない。妻も同じだ。事故はどうしてもないからだ。しかし、もし、子どもが本を借りて雨の中にほったらかしにしておれば妻は怒りだす。彼女にとって本は大切なものだからだ。そんな場合、私は無頓着でいる。私にとって本は大切なものではないからだ。逆に、今度は、私ののみが壊されると、私は怒るが、妻はそれが不思議だという。私にとって道具は大切なものだが、彼女にとっては意味のないものだからだ。

サマーヒルの生活はいつも「人に与える」種類のものだ。訪問客が来ると、われわれは生徒以上に疲れる。訪問客もまた何かを与えてもらうことを期待しているからだ。与えることの方が受け取ることよりすばらしいことだろうが、疲れることも確かなのだ。

土曜日の自治会でも、子どもと職員の衝突がある。これは当然のことだ。年齢の違う人たちが形成した社会の中で、おとなが子どものためにすべてを犠牲にしようとするれば、子どもは甘やかされてしまうだろう。たとえば、みんながベッドについたあと、上級生が大声で笑ったり、おしゃべりをしたりしておれば、教師は、眠れないから静かにしてくれと抗議をするものだ。ハリー先生の苦情はこうだった。彼は1時間の間、かんなをかけてドアとして使う仕切りを作った。昼食のためにしばらく休憩して戻ってみると、ビリーがその板を本棚に作り変えていたのだ。私もはんだ小手の道具一式を借りていって戻さない生徒には抗議をする。妻が怒ったのは、夕食後、3人の生徒が彼女のところにやってきて、お腹がすいたといったのでパンとジャムをやったところ、翌朝、そのパンが食べられないままで捨てられていた時のことだった。ピーター先生も

生徒が粘土の投げ合いをして困るといっている。こういうふうには、おとな側の見方と少年たちの自覚不足との間に起こるさまざまな摩擦が絶えない。しかし、個人攻撃をするようなことは決してない。個人に対してあと味の悪い感情が残ることはないのである。この摩擦がサマーヒルの活力となっているのだ。毎日何かが起こる。1年中で、何も起きない退屈な日は1日たりともない。

嬉しいことに、わが校の職員には所有欲というものがない。もっとも、1ガロン3ポンドもするペンキを一缶買ってきたばかりなのに、生徒がそれを拝借して、古いベッドを塗り変えたのを見ると腹が立つものだ。私には自分の車や、タイプライターや、工作用具に対しては、自分のものだという意識はある。しかし、生徒が自分のものだという気持ちは全くない。もし、そういう気持ちを持つならば、校長になる資格はないと思う。

サマーヒル校内の物が消耗したり、壊れたりするのは当然の成り行きである。恐怖の導入によってこれを防ぐことはできる。しかし、神経の消耗は防ぐことはできない。子どもはいつも質問し、われわれはそれに答えなければならないからだ。私の部屋には1日50回は生徒が訪れ、「今日は映画の日ですか」「どうしてぼくは個人授業をしてもらえないの」「パムを見なかった?」「エナはどこにいるのか知らない?」といったいろんな質問をしてくる。こんなとき疲れることはないけれども、プライベートな生活が持てない。一つの理由は——これはおとなから見た見方だが——この校舎は学校に向いたものではないからだ。われわれはいつも生徒を優先している。しかし、学期が終わるころには、妻も私も神経を擦り減らしてしまっている。

ここで一つ特筆すべきことは、職員がめったに腹を立てないということである。このことはわれわれ職員と生徒との関係をよく物語っている。子どもは実際、われわれに生きる喜びを与えてくれる。だから、腹を立てるようなことはめったにない。子どもが自由に自分自身の存在を認めることができれば、他人を憎むようなことにはならない。おとなを怒らせても、そんなことはおもしろくもなんともないのである。

サマーヒルの女子職員の中に批判を気にし過ぎる先生がいた。女子生徒たち

はこの先生をからかって、槍玉にあげた。他の先生をからかうようなことはなかった。なぜなら、からかっても怒ったりすることがないからである。生徒は威厳を傘に着るような人をからかうものである。

サマーヒルの子どもたちには、弱い者いじめが存在するのだろうか。まあ、一般的には子どもは何らかの形で自我をむき出しにするものである。しかし、自由を失った子どもに見られる極端な弱い者いじめは、自己に向けられた憎悪に対する反抗の表れである。サマーヒルの子どもはみんな、先生から嫌われているとは思っていないので、弱い者いじめする必要がないのである。弱い者いじめをする子どもの家庭には愛と、子どもを理解してやる心が欠けているのである。

私が小学生のころは、鼻血を出すような喧嘩は日常茶飯事であった。このように、相手を殴ることで自己表現をしようとする子どもの心の中には憎悪があり、憎悪に満ちた少年はそれを発散させるために喧嘩が必要となるのである。子どもが憎悪のない環境の中に置かれれば喧嘩はなくなるものである。

フロイドが弱い者いじめを強調したのは家庭や学校をあるがままに観察する必要があることを言いたかったのだと思う。狂犬病の心理は治った人を鎖に繋いだままで観察してもだめである。同様に、人間の心理も、人間を鎖に繋いだ状態——つまり、憎悪で満たされた生活を強いられてきた世代が構築した社会の中で——理論化しようとしてもだめである。サマーヒルには厳しい学校で頻繁に見られるような弱い者いじめは存在しない。

しかしながら、わが校の自由とは常識を逸脱することではない。われわれは子どもの安全を第一に考える。たとえば、生徒6人に対して1人の付添いがいないと水泳を許していない。また、11歳以下の子どもには、通りで自転車に乗ることを禁じている。こういった規則は生徒総会で生徒自身が決めたものである。

しかし、木に登ってはならないという規則はない。木に登ることは人生を学ぶための教育といえる。危険なことを全部禁止すれば生徒は臆病な子になってしまうだけである。屋根に登ることは禁止している。また、空気銃や、ほかの

危ない武器の使用も禁じている。私はいつも、ちゃんばらごっこが始まると不安になる。剣の先にゴムか布をつけてカバーさせるのだが、それでも、終わるまでは気掛かりだ。本当の意味の慎重と不安との区別はなかなかむづかしいものだ。

私は学校で「お気に入りの子」を作ったことはない。もちろん、好き嫌いはいつも存在する。しかし、それを表面に出さないことにしている。おそらく、サマーヒルがうまくいっている一つの理由は、子どもたちが平等に尊重されているという気持ちを持っているからだと思う。学校で生徒に対しておセンチな感傷に浸ることを戒めている。子どもと接していると、どうしてもあひるが白鳥に見えるものである。絵の具を塗りたくっている子どもを見て、「これはピカソのような大画家になるんじゃないか」と考えがちである。

私が教職に就いた学校では、ほとんどの職員室が、陰謀と憎悪と嫉妬の館さながらであった。わが校の職員室は天国である。どこかの国のように組合と非組合とのスパイ合戦など存在しない。教師も生徒同様に、自由の中で幸福と善意を享有するのである。ときどき、新任の教師が自由に対して子どもと同じ反応をすることがある。無精髭をはやしたままで、いつまでも剃らなかったり、朝寝坊したり、校則を破ることさえする。しかし、幸いなことに、おとなの場合は子どもよりも劣等感を克服する期間が短いものである。

私は隔週の日曜日に、子どもたちが主役になる冒険談をすることになっている。これはもう何年も続いている。今までに、アメリカの奥深くにも連れていったし、海中探険もしたし、雲の上でのすばらしい冒険談もしてやった。いつのことだったか、話の中で私が死んだことがあった。後任者にマギンズ先生という厳しい先生がやってきた。授業には必ず出ないと叱られる。「それいけ」というようなことばを使うことさえ許されない。そして、生徒はみんな、おずおずとこの先生のいう通りに従ったという話をした。

すると、3歳から6歳までの子が怒ってこういった。「いいえ、ぼくたちは従いませんでした。ハンマーを持ってきて一発で殴り殺しました。先生、ぼくたちがそんな男の存在を認めるとでも思ってるんですか」

最後に、私が生き返って、マギンズ先生を校門から追い払うと、拍手喝采がわき起こった。この子どもたちには厳しい学校での経験が全くないもので、彼らの怒りの反応は自然なものであった。校長が子どもの味方をしない学校なんて、この子たちには考えられないことであった。それはサマーヒルでの経験のためだけでなく、家庭でも親が彼らの味方をしてくれるからである。

かつて、アメリカの心理学の教授が、われわれの学校は孤立した島だといった。つまり、社会と隔絶しているといって批判したのである。これに対する私の反応はこうである。もし、私が社会の一部を構成するような学校を小さな町につくろうとすれば、どんなことが起こるだろうか。100人のうち何パーセントの親が、授業に出て出なくともよいというような学校制度を認めるだろうか。どのくらいの親が、子どものマスタベーションの権利を認めるだろうか。私はしょっぱなから妥協と戦わなければならなくなるだろう。

サマーヒルは確かに島である。それはしかたのないことである。子どもたちの親は遠くの町や外国にいるのだから。レイストンやサフォークの村に親を全員集合させることはできない。サマーヒルはレイストン村の文化、経済、社会の一部にはなりえないのである。

しかし、付け加えておきたいことは、わが校はレイストン村と孤立しているわけではないということだ。地方の人たちとの交流もあるし、両者の関係は友好的なものである。しかし、基本的には、サマーヒルは社会の一部とはいえない。つまり、私は地方新聞の編集長に卒業生の成功談を載せてくれなどと頼むようなことは考えたこともないからである。

われわれは町の子どもたちと一緒にゲームをして遊ぶこともあるが、教育の目的が違う。わが校は宗教をとり入れていないので町の宗教団体とは無関係である。もし、サマーヒルが町のコミュニティー・センターの一部となれば生徒に宗教教育を施さなければならなくなるだろう。

私は、先程のアメリカの教授の批判を次のように受けとめる。ニールは社会の反逆者にすぎない。彼の唱える制度は調和した社会を形成する手助けにはならない。児童心理と、社会の児童心理に対する無知との間のギャップを埋める

ことはできない。人生肯定派と否定派とのギャップ、学校と家庭とのギャップを埋めることはできないのだと。これに対する私の回答はこうだ。私は社会を改革しようとしているのではない。私が社会に対して言いたいことは、社会の中にある憎悪や処罰や迷信を捨ててほしいということだ。私は社会に対する私自身の信念を書いたり、言ったりはするけれども、それを社会の中で実行しようというのではない。もし、実行しようとするれば、危険人物として殺されることになるかもしれない。

たとえば、わたしが青年の自然なフリーセックスを認める社会をつくろうとすれば、青年を惑わす、ふとどき者として葬り去られることになるだろう。私は妥協は嫌いだ、この点ではしかたがない。私の仕事は社会の改革にあるのではなく、子どもに幸福をもたらすことにあるからだ。

サマーヒルと普通の学校との違い

人生の目的は幸福の追求、つまり、興味の発見にあると思う。教育は人生に旅立つための準備である。われわれの文明は必ずしも褒められたものではない。教育、政治、経済、すべてが戦争への序曲となっている。医学もまだまだ及ばない。宗教も横領や強盗を追い払うことはできない。われわれは人道主義を誇っているけれども、いまだに野蛮な狩猟を認めているではないか。現代の進歩とは機械の進歩である。つまり、ラジオ、テレビ、エレクトロニクス、そしてジェット機の進歩を意味する。新しい世界戦争の足音が一步一步近づいてくる。世界の社会に対する良心はいまだ未熟なものである。

今、ここで質問を許されるなら、いろんなものがとび出してくる。

「なぜ、動物より人間のほうが多くの病気にかかるのか」

「人間はなぜ、動物とちがって、戦争で殺し合い、憎しみ合うのか」

「なぜ、ガンは絶えないのか」

「なぜ、自殺が多いのか」

「なぜ、猟奇的な性犯罪が多いのか」

「なぜ、ユダヤ人を憎むのか」

「なぜ、黒人を嫌ってリンチにするのか」

「なぜ、人は陰口をいうのか」

「なぜ、セックスはわいせつなのか」

「なぜ、私生児が差別されるのか」

「なぜ、愛と、希望と、善とをすべて失なった宗教が今でも続くのか」

われわれの誇る「すぐれた文明」に対する疑問は果てしなく続く。

なぜ、私がこういう疑問をぶつけるのか。それは、私が教師であるからだ。私が青少年と接しているからだ。普通、教師のする質問は教科についてのものばかりである。フランス語や、古代の歴史の話ばかりきいて何の役に立つのだろうか。これらは、人生の目標、つまり、幸福を追求するという大きな問題の前では些細な問題ではないか。

現代の教育のどれだけが、本当に為になる「自己表現」と結び付いているだろうか。たとえば、手工芸というのは、先生の監視下のもとでピンを作らせることにすぎないのではないのか。遊びの要素を教育に導入したことで有名なモンテッソリーの教育でさえも、私は不自然なものとして取り入れることはできない。不自然さの中に創造性は生まれないからである。

家庭では、子どもには何かを教え込まなければならないと信じられている。子どもの回りには必ずおとながいて、新品のおもちゃの自動車をどうやって動かすか教えている。また、赤ん坊が壁にかかっている物に手を伸ばすと、すぐ、だっこして椅子の上に乗せてやる。しかし、われわれは、子どもに自動車の動かし方を教えるたびに、子どもから人生の喜びを奪っていることに気づいているのであろうか。われわれは子どもから、発見の喜び、障害物を克服する喜びを奪っているのである。さらに、その子は、人から手伝って貰わないと何もできない劣等生だと思い込むようになるだろう。

親は、学校での学習がいかに重要でないか、ということになかなか気づかな

いようだ。子どもは、おとな同様に、自分の学びたいものを学ぶものである。「好きこそ物の上手なれ」である。試験でいい点数をとると賞品を与えるようなやり方は人格形成の防げになる。本からの勉強だけが教育だと信じて疑わないのは「先生」だけである。

本は学校でいちばん無用のものである。子どもに必要なものは読み書き算数である。あとは、道具と、粘土と、スポーツと、演劇と、絵画と、そして自由があればよい。

青少年が学校でやる学習のほとんどは時間と、エネルギーと、忍耐の浪費であるといえる。若者から遊ぶ権利を奪っているからだ。若い元気な体に、老いばれた老人の頭をくっつけるようなことをして何になるというのであろうか。

私は教員養成学校や、大学の学生を前にして講演をするとき、学生たちの幼児性にショックを受けることがよくある。彼らは、たしかに知識はある。いつでも、昔の名言を引用できる頭を持っている。しかし、人生観となると心もとない。彼らは頭を使う訓練は受けてきたけれども、心で感じることの大切さを学んではいない。たしかに、彼らは熱心で、人なつこい、感じのいい青年である。しかし、何かがたりない。感情的な要素、つまり、頭よりも心の方が大切だ、という認識に欠けるのである。私はこれらの青年に向かって彼らが見逃してきた、また、今でも見逃がしつつある世界の話をするのである。彼らの教科書には、人権とか、愛とか、自由とか、自己決定といったものは出てこなかった。だから、今のような制度がこのまま続けば、本を勉強することだけが大切だという世界ができあがり、頭と心はますますかけ離れたものになっていく。

もう、学校の学習観を変える時期にきているのではないか。学校では、子どもが数学や、歴史、地理をしっかりと、科学と、美術と文学をちょっぴり学習するのがいいとされている。普通の子どもはこういう科目にはあまり興味を示さないことを認識する時がきたのではないか。

このことは新入生を観察すればよくわかる。彼らは、サマーヒルに来れば授業に出なくてもいいことがわかると「ヤッホー！ もうあの退屈な数学や他の科目ともおさらばだ」といってはしゃぎ出すものだ。

私は学問を否定しているのではない。学問は遊びの次にくるべきだといっているのだ。また、遊びを導入して学問しやすくするような人為的操作には感心しかねる。

学問は大切なものだ。しかし、みんなにとって大切なものではない。ニジンスキーはペテルスブルグの学校で学科試験に落ちた。この試験に合格しないと国立バレエ学校には入れなかった。彼は学科はまったく嫌いだった。他に興味があったからである。そこで学校側は解答つきの試験問題を彼のために作成した——と伝記にある。もし、ニジンスキーが本当に試験にパスするまで学校側が門を閉ざしていたならば、世界にとって何という損失だったことだろうか。

創造力のある人は、その独創性と天性とが要求する道具を求めて、自分の学びたいものを学ぶものである。教室の中で学習ばかりを強調すると、どんなに創造性が失われていくか測り知れない。

私は、幾何学で毎晩、泣かされている女の子を見てきた。彼女の母親は彼女を大学へ行かせたかったが、彼女は芸術の方面へ進みたかった。彼女が大学入試を7度も失敗したことをきいて、私は内心、嬉しかった。もうこれで母親も、彼女の好きな演劇の世界に入ることは反対しないだろう。

数年前、コペンハーゲンで14歳の女の子がサマーヒルに入学して、3年間過ごしたが、すごくきれいな英語を話すのできいてみた。「君は、英語の成績はいちばんだったろう？」彼女は顔をゆがめて悲しそうにいった。「いいえ、ビリでした。英文法がだめでしたから」この打ち明け話はまさに、おとなが教育とは何かということを考え直さねばならない、いい例ではないか。

しかたなく、どうにか大学を卒業して、視野の狭い教師になったり、やぶ医者になったり、役にもたない弁護士にしかねれない学士さまは、もしかすると、機械工か、レンガ職人か、警官になれば一流になれるかもしれない。

だいたい、15歳まで読むことのできない男の子は、将来、機械工か、電気技師になる素質をもった子どもといえる。数学や物理の授業に出ない女の子はどうなのかを一般論として述べるのはむづかしい。普通、そういう女の子は裁縫が好きな場合が多い。そして、将来、仕立て屋かデザイナーになるものもいる。

こういう子どもたちに2次方程式やボイルの法則を学ばせようとするカリキュラムを「正気」だといえるだろうか。

コールドウェル・クックは「遊戯法」という本を書いた。その中で遊びによる英語教育法を唱えた。これはおもしろい本で、ためになることがたくさんあった。しかし、このやり方も、学問至上主義という点では変わりがない。彼の主張は、学習はとても大切なものなので遊びをまじえて楽しくやろうという訳である。このように、子どもは何かを学んでいない限り、時間の浪費であるという考えは呪いである。全国の教師や教育委員会を盲目にしているという意味で呪いである。50年前の標語は「努力して学べ」だったが、今は「遊んで学べ」に変わったにすぎない。つまり、遊びは目的に到達するための一つ的手段にすぎないのだ。しかし、どんな立派な目的があるのかさっぱりわからない。

もし教師が、子どもが泥遊びをしているのを見て、川の沿岸の浸蝕作用を学習させるいい機会だと考えるとき、その教師の目的とはいったい何であろうか。浸蝕作用などに注意する子どもがいるであろうか。多くの「教育者」は、子どもには何かを教えておけばそれでいいのであって、内容は問わない、と考えている。また、現状のようなマスプロの工場に成り下がった学校では、教師は何かを教えて、それが後生大事な教育だと考える以外に方法はなさそうである。

私が教師の前で講演をするときは、まず、教科やしつけや授業の話はしないと断っておく。聴衆は一時間の間、静かに聞いてくれる。講演後、拍手をいただき、司会者が質問の時間だという。そして、質問される内容の4分の3が教科と教授法についてのものである。

私はなにも威張ってこの話をしているのではない。ただ、教室や、牢獄みたいな校舎が壁になって、教師の視野が狭くなり、教育の本質を見失っているのが残念なのである。教師の仕事は首から上だけだと思っている。だから、当然、子どもにとって重要な感情の側面が軽視されるのである。

私は青年教師が立ち上がる日を夢みるのである。社会の諸悪と戦うためには、高等教育も大学教育も役には立たない。学識のあるノイローゼも無知文盲のノイローゼもノイローゼに変わりはない。

資本主義，社会主義，共産主義を問わず，どの国でも，青少年の教育のために立派な校舎が建てられている。しかし，子どものために，どんなにすばらしい研究所や研修所が建てられても，親や，教師や，現代文明の抑圧的な圧力が生み出した社会悪や感情の病を克服するための手助けにはならないことを知るべきであろう。